

群 教 セ	J01 - 01
	平16.220集

友達を思いやる気持ちを育てる指導の工夫

- 『きらきら言葉』を使おう』の活動を通して -

特別研修員 岩崎 雄一 (藤岡市立神流小学校)

《研究の概要》

本研究は、言葉について考え、友達の気持ちを温かくする言葉(「きらきら言葉」)を使う活動を通して、友達を思いやる気持ちを育てるための指導のあり方を明らかにしようとしたものである。具体的には、今までの言葉の使い方を省みた後、「きらきら言葉」を使おう週間を実施し、その振り返りから「本当のきらきら言葉」に必要なことを考える活動を行った。

【キーワード：人権教育 小学校 学級活動 思いやり 人間関係】

主題設定の理由

小学校3年生段階の子どもたちは、親切で優しい児童が多い。しかし、その行為は親しい友達などの身近な人物に対してということが多い。それは、この段階での親切という行為が、相手の立場や気持ちを理解してのものであるというよりも、互いの親密さに由来することが多いからである。そこで、多くの友達と接するなかで、だれに対しても温かい心や思いやりの心を持ち、相手の立場や気持ちを考えて親切にしようとする心情を高めていくことが必要となる。

本学級(小学校3年生 男子19名 女子20名)の児童は、明るく活動的で、自分の考えを進んで発表することができる児童が多い。またグループ学習や係活動などに意欲的に取り組むことができる。しかし、自分の意見を発表することで満足してしまい、友達の発表を理解しようと聞くことには無関心であり、落ち着いて話を聞くことができない。また学校生活の様々な場面で、軽はずみな言動や、自己主張のぶつかりあい、過ちを厳しく指摘する言動などから言い合いになったり、けんかに発展する場面が多く見られる。一般的に小学校3年生は、対人関係の広がりとともに、相手の気持ちを自分に置き換えてとらえることができるようになってくる発達段階であるといわれているが、実態はまだまだ自己中心的な面が多く残り、友達の気持ちや立場を考えた言動をとろうという意識が十分ではないように思われる。

クラスは、児童が多くの友達と生活する小さな社会である。明るく楽しいクラスをつくるためには、一人一人が友達の気持ちや立場を大切にしたりより良い人間関係を築くことが必要である。本研究では、よりよい人間関係を築くうえで大切な友達を思いやる気持ちを育成したいと考えた。

言葉は、友達とコミュニケーションをとるうえで欠かせないものである。しかし自分が言った言葉が、友達をどんな気持ちにさせたのかを振り返ることは少ない。何気なく言った言葉が友達を傷つけていることに気づかないような場面も多く見られる。そこで言葉に焦点を当て、言われたときの気持ちについて話し合い、どんな言葉が心を温かくするのかを考えることにより、思いやりの気持ちの大切さに気づかせたいと考えた。

コミュニケーションの基礎となる言葉について考え、友達を大切にしたり言葉を使おうとする気持ちを育てることは、友達を思いやる気持ちを育成し、児童の人権意識を高めることにつながるであろうと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

相手の気持ちを温かくしたり、悲しくしたりする言葉があることを学習し、日常生活で相手の気持ちを温かくする「『きらきら言葉』を使おう」の活動を行う。活動後の振り返りで「本当の『きらきら言葉』」について話し合うことにより、児童は友達の気持ちや立場を考えた言葉の大切さを知り、友達を思いやる気持ちが育成できることを実践を通して明らかにする。

研究の見通し

次の見通し1から3の取り組みを行うことにより、友達を思いやる気持ちを育成することができるであろう。

- 1 学級活動 において、相手の気持ちを考えない言葉によって起こったトラブルをもとに作成した文章資料から言葉の大切さについて考え、自分が言われて気持ちが温かくなった「きらきら言葉」や悲しい気持ちになった「ちくちく言葉」を探し、発表し合うことにより、相手の気持ちを温かくしたり、悲しくしたりする言葉があることを知り、自分の言葉の使い方を省みることであろう。
- 2 学級活動 の学習後に、1週間「『きらきら言葉』を使おう」を合い言葉に生活し、1日ごとに友達に言われたきらきら言葉とその時の気持ち、自分が使ったきらきら言葉とその理由をカードに記入する振り返り活動を行うことにより、児童は「きらきら言葉」の温かさを実感すると共に、本当に心が温かくなる場合とそれほど温かくなれない場合があることに気づくことであろう。
- 3 「『きらきら言葉』を使おう」週間の振り返りを基に、道徳 において「本当の『きらきら言葉』」と形式的に使った「きらきら言葉」の言葉の背景にある気持ち、表情や態度の違いについて話し合い、「本当の『きらきら言葉』」に必要なことについて考えることにより、友達を思いやる気持ちの大切さに気づくことであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「友達を思いやる気持ち」について

本研究では「友達を思いやる気持ち」を、相手の気持ちを積極的に理解しようとする意欲、友達の立場や気持ちを大切にできる心情ととらえる。困っている人がいたら助けたいと思う気持ち、悲しんでいる人がいたら気遣おうとする気持ち、喜んでいる人がいたら一緒に喜びたいという気持ちを育成したいと考えた。

(2) 「きらきら言葉」「ちくちく言葉」について

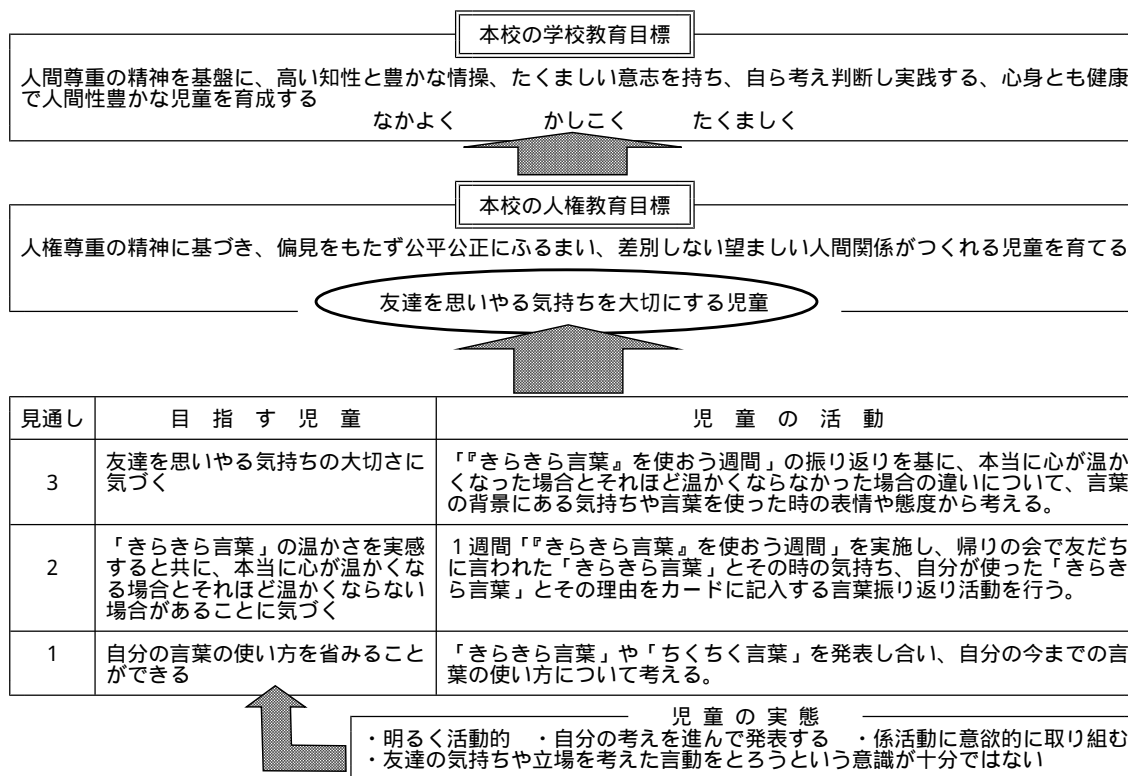
本研究では、友達をうれしい気持ちにしたり、元気にしたり、心を温かくする相手の立場や気持ちを考えた言葉を「きらきら言葉」、友達の立場や気持ちを考えない、不快な気持ちにさせる言葉を「ちくちく言葉」と名付けた。短く、分かりやすい言葉で表現することで、より印象深く児童の心に残るであろうと考えた。

(3) 「本当の『きらきら言葉』」について

表面的・形式的に使う「きらきら言葉」ではなく、相手に対する思いやりの気持ちから発せ

られた言葉である。

(4) 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

検証にあたっては、学級全体及び抽出児童の学習活動での様子や学習カード「言葉について考えよう」「『きらきら言葉』を使おう」「『きらきら言葉』を使おう週間を振り返って」「本当の『きらきら言葉』を考えよう」の記述内容を通じてその変容をとらえた。

抽出児童A子は、活動的で何事にも積極的に取り組むことができるが、不平不満が表情や言葉の使い方に現れがちな児童である。

(1) 相手の気持ちを温かくしたり、悲しくしたりする言葉があることを知り、自分の言葉の使い方を省みることができたか。(見通し1)

ア 実践の概要

学級活動では、まず言葉によって友達を悲しい気持ちにさせたり、怒りを生じさせたりする場合があることに気づくため、身近な文章資料(楽しそうに話をしている輪に加わろうと話しかける高史。おしゃべりに夢中な正男が何気なく言った「関係ないよ」の一言で、高史はしかたなく自分の席に戻っていく。)を提示した。

次に相手の気持ちを不快にさせる言葉を「ちくちく言葉」、相手の気持ちを温かくする言葉を「きらきら言葉」と名付け、今までに言われたことのある「ちくちく言葉」、「きらきら言葉」を探し、その時の気持ちをまじえて発表する活動を行った。

学習の最後に、今までの自分の言葉の使い方を考えた。

イ 結果と考察

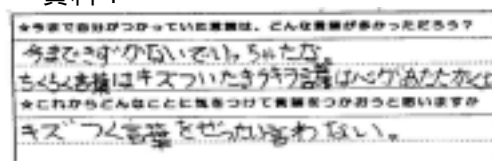
資料中の「関係ないよ」という言葉によって、言われた主人公は「嫌な気持ちがした」「さみしい」「つまらない」「残念」などの悲しい気持ちになったという意見と「何でそんなこと言ったんだ」「くやしい」「もうしゃべりたくない」といった怒りの気持ちになったという意見が発表された。また、「自分も言われたことがある。」という発言も聞かれた。

「きらきら言葉」・「ちくちく言葉」を探す活動では、30の「きらきら言葉」と66の「ちくちく言葉」が見つかった。発表を聞きながら「そんな言葉を言ってもらったら、うれしいよね」「そんな言葉を言われたら僕だって嫌だよ」「わたしも言われて悲しくなったことがある」などの共感的なつぶやきや「ちくちく言葉の方がずっと多いね」「たくさんちくちく言葉を使っていたんだね」などといった驚きの言葉が聞かれた。

学習カードへの記述では「ちくちく言葉をたくさん言っていたな。きらきら言葉はいい気持ちになるな」「ちょっとだけちくちく言葉を使っていたな。ちくちく言葉は人を傷つけていたな」「ちくちく言葉を少しだけ言ったことがあるけど、きらきら言葉の方が多かった」などと、全ての児童が自分の言葉の使い方について省みることができた。

資料1は、A子のこれまでの言葉の使い方の振り返りである。今まで気づかず「ちくちく言葉」を使っていたことや「きらきら言葉」の温かさに気づいたことがわかる。またこれからは、「きずつく言葉をぜったい言わない」と自己決定している。

資料1



以上のように、身近な文章資料を提示し自分たちが何気なく使っている言葉について考

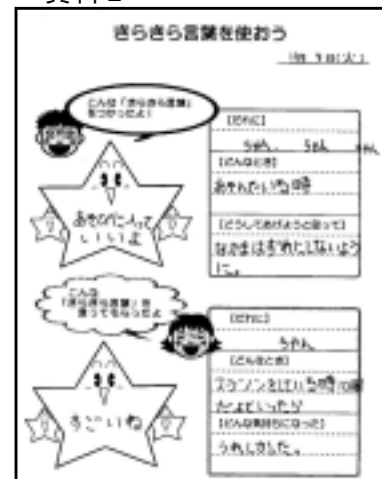
える機会を設けることにより、相手を傷つける言葉があることに気づくことができた。また「きらきら言葉」「ちくちく言葉」を探したり、発表し合う活動を通して、相手の気持ちを温かくしたり、悲しくしたりする言葉が身近な生活の中にもたくさんあることに気づくことができた。これらの学習を通して、より具体的に自分の言葉の使い方を振り返ることができたと考える。

(2) 『きらきら言葉』を使おう』を合い言葉に1週間生活し、言われた「きらきら言葉」とその時の気持ち、使った「きらきら言葉」とその理由をカードに記入する言葉振り返り活動を行うことにより、「きらきら言葉」の温かさを実感するとともに、同じ「きらきら言葉」でも心がそれほど温かくなれない場合があることに気づくことができたか。(見通し2)

ア 実践の概要

学級活動 の言葉の使い方の振り返りから、『きらきら言葉』を使おう』と呼びかけ、『きらきら言葉』を使おう』週間を実施した。帰りの会でその日に使った「きらきら言葉」や、言ってもらった「きらきら言葉」についてワークシートに記入していった。(資料2)

資料2



活動の振り返りで、ワークシートに本当にうれしかった、元気が出たという「きらきら言葉」とその時の状況について記述した。またそれほどうれしくなかった、元気が出なかった「きらきら言葉」とその理由も記述した。

イ 結果と考察

1週間の取り組みで、88%の児童が「きらきら言葉」を毎日使うことができた。使われた「きらきら言葉」は、45種類を数えた。日を追うごとに使われる「きらきら言葉」の種類が増えていった。

A子も仲間はずれにしないように「遊びに入っているよ」、理科の観察の時一人だとできないから「一緒にやろう」、机を倒しちゃって大変そうだったから「だいじょうぶ」、教室に一人でいて寂しそうだったから「図書室へ行こう」、プリントを渡すとき相手が気持ちよくなるように「どうぞ」といった「きらきら言葉」を使っていた。

活動後の振り返りでは、全ての児童が本当にうれしかった、元気が出た「きらきら言葉」を

記述し、言ってもらった気持ちでは、「うれしかった」「いい気持ちでした」「がんばろうと思った」「助かった」「心が晴れた」「頑張れそうな気がした」「心がぼわんとした」「いやされた」等の記述が見られた。またそれほどうれしくなかった、元気が出なかったという「きらきら言葉」については、33人の児童が記述している。「怒った声で言われたのでいやな気持ちになった。」「心がこもっていなかったから、あまりうれしくなかった。」「あまり心配していないような顔だったから、元気が出なかった。」と言われた時の気持ちを記述している。

資料3は、A子の振り返りである。遊んでくれる友達がいるかと心配している時に言われた「すべり台で待っているよ」がとてもうれしかった、タイムが自分の考えていた目標より遅い時に言われた「すごいね」がそれほどうれしくなかったと振り返っている。

以上のことから「『きらきら言葉』を使おう週間」を自分たちの言葉の振り返りを基に実施したことにより、児童は意欲的に活動に取り組むことができた。また1週間実施したことにより、いろいろな場面で「きらきら言葉」を使うことができた。「きらきら言葉」でも本当に心が温かくなる場合とそれほど温かにならない場合があることに自分の体験を通して気づくことができたと考える。

(3) 「『きらきら言葉』を使おう週間」の振り返りを基に、本当の「きらきら言葉」に必要なことについて考えることにより、友達を思いやる気持ちの大切さに気づくことができたか。

(見通し3)

ア 実践の概要

道徳において、「『きらきら言葉』を使おう週間」の振り返りを基に、「本当の『きらきら言葉』」と「ただの『きらきら言葉』」(児童が命名)について、言葉の奥にある気持ちや使った時の態度や表情について話し合った。

話し合いのまとめとして、「本当の『きらきら言葉』」について必要だと考えたことを学習カードに記入した。

イ 結果と考察

「本当の『きらきら言葉』」として、「一緒に遊ぼう」「大丈夫」「手伝ってあげようか」等の言葉が発表された。また同じ言葉でも「ただの『きらきら言葉』」の例として、10の言葉が発表された。「本当の『きらきら言葉』」・「ただの『きらきら言葉』」をどんな気持ちで使ったかを問うと、以下の気持ちが出された。

本当の「きらきら言葉」	ただの「きらきら言葉」
<ul style="list-style-type: none"> ・一人で寂しそうだったから ・平気かなと思って ・大変そうだったから ・心配そうだったから励まそうと ・慰めようと思って ・入りたそうだったから ・かわいそうだったから ・だいじょうぶかなと思って 	<ul style="list-style-type: none"> ・覚えていない ・ただ何となく ・言わないと失礼だから ・行儀よく渡そうと思って ・『きらきら言葉』を使おう』を果たそうと思って

また「ただの『きらきら言葉』」を言われた側に、なぜうれしく感じられなかったのか、元気がでなかったのかを問うと、次のような理由が発表された。

資料3



・気持ちがこもっていなかった ・言った後にいやなことをした ・笑っていて、本当みたいじゃなかった
 ・怒っているように言った ・心をこめて言っていない ・からかっているような顔だった ・声が小さかった
 ・あんまり痛くなかったから ・先生に怒られないように言った言葉だから

最後に「本当の『きらきら言葉』」となるには、どんなことが必要かを考えた。(複数回答)

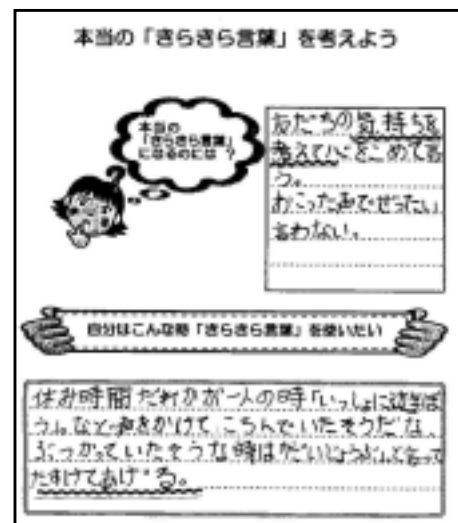
「思いやりの気持ちを持つ・やさしい気持ちを持つ・友達の気持ちを考える」といった内容を記述した児童が82%であった。また「やさしく言う・心を込めて言う」などの使う時の態度を記述した児童が58%であった。

「思いやりや本気の態度や本当に心配そうな言い方が大切。言葉だけじゃなくて、そのあとに本気で保健室につれて行ったり、楽しく遊んだりできるようにする。」といった記述が見られ、言葉だけでなくそれに伴った行動が大切であることに気づいた児童もいた。

資料4は、A子の学習カード(下線は担任)である。友達が、本当にうれしかった、元気が出たという温かい気持ちになるには、「きらきら言葉」さえ使えばいいのではなく、言葉の奥にある相手への思いが大切なこと、言葉だけでなく、相手を思った行動が大切であるということに気づいていることがわかる。

学習後の児童の様子を見ると、自分さえ良ければといった言動が減少し、譲り合う場面も見られるようになってきた。また学習や係・当番活動等の場面で、困っている友達や大変そうな友達に優しく声をかけたり、手を貸してあげる場面が多く見られるようになってきた。

資料4



研究の成果と今後の課題

1 研究のまとめ

「『きらきら言葉』を使おう週間」を実施したことにより、「きらきら言葉」でも、本当にうれしかったり、元気づけられたりする場合とそれほどうれしく感じられない場合があることを体験を通して感じる事ができた。また体験を基に、「本当の『きらきら言葉』」に必要なことを考えることによって、相手の気持ちを考えた、思いやりの気持ちの大切さに気づく事ができた。

「それ、ちくちく言葉だよ。」日常生活の中で、児童同士がチェックし合う場面も見られるようになってきた。言葉を意識して使おうとしている様子がうかがえる。また「きらきら言葉を使ってお友達がいっぱいできたような気がする。前は、嫌いな子もきらきら言葉を言われて好きになった。」という感想も見られるように、「きらきら言葉」を通じて友達関係が広がったり、深まったりしている様子もうかがえる。

2 今後の課題

「『きらきら言葉』を使おう」の活動を通して、児童が気づいた「思いやりの心の大切さ」を知識としてだけでなく、実際の自分の言動に生かしていけるように「本当の『きらきら言葉』を使おう」週間を実施するなど、支援を続けていきたいと考える。

参考文献等 ・八巻 寛治 著 『構成的グループエンカウンター エクササイズ50選』